ダンジョンに何を求めているかを探すのは間違っている？

ゼクス神楽

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ベル君ロキファミリアルートｉｆ

色々原作から離れてる

目　次

とある良き始まりの日 ―――――― 1
始まりはやっぱりダンジョンだよねぇ 9
情報の宴 ～宇宙（ユニバース）～ 14
宴は踊る ―――――― 20

とある良き始まりの日

巨大な市壁に囲まれ、その中では只人や獣人などの亜人、そしてはるか昔に天より娯楽を求め降臨した神々など多くの生命が住まう都市。

未だかつて破られる事なき巨大な市壁、その中央部に聳え立つは天に最も近いとされ、バベルと言う名称を持つ神の塔。

ベル「……ここが…オラリオか…」

今日、ここに降り立つ少年の名はベル・クラネル。英雄に憧れを持ちこの地に至った若干14歳の少年。

そう、こここそは世界の中心と呼ばれ地下に広がり、無限の資源と呼ばれる地下迷宮を保有する唯一の場所。

その名は『迷宮都市オラリオ』

今ここに、新たな夢と誓いを持つ少年の物語は始まろうとしている。

～数日後～

少年、ベル・クラネルことベルは冒険者登録をする為にギルドに提示されたファミリアを探していた。

しかし

A「あぁ？ファミリアにはいりたいだぁてめぇみたいなガキが入れる訳ねぇだろ」

B「冷やかしなら他所でやれ」

C「ファミリアにはいりてぇなら金持ってきな金それが無いなら話にならねぇよ」

とこのような感じで数日掛けて回ったファミリアは全滅、残すはオラリオの二大派閥、ロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアだけになってしまった。

しかしまずベルは美神の派閥…フレイヤ・ファミリアの所は行く気すらない。理由は簡単だ、かの派閥は全員女神至上主義のやべー奴一途な人が多く集まっており、日夜本拠で殺し合いをしていると言うのはオラリオに住まう者なら常識である。

なのでまあここは候補から外す。残るはもう一つの大派閥、ならば善は急げとも言うのだしかの派閥の本拠…黄昏の館（厨二病感満載）に急ぐのだった。

派閥の門の前に辿り着き入団したい旨を伝えると門番はすぐ主神に取り計らってくれた様だ。

そして今は派閥の幹部陣はダンジョンへの大規模な遠征の為不在と言うことで主神と面接をし、仮入団の期間を経て再度幹部陣と入団の合否を決定する旨を伝えられた。

そして今目の前にいるのがロキ・ファミリアの主神、ロキその人？（神）である。

ロキ「んーと君がうちのファミリアに入りたい言うてる子やな」

ベル「はい。ベル・クラネルと言います」

ロキ「それじゃあベルたんやな。ベルたんはなんでオラリオに来たん？」

ベル「それは…英雄になるためです」

ロキ「ふーん…英雄かぁ…何なりたい思たん？」

ベル「僕の祖父が読み聞かせてくれた英雄譚で凄いなって思ったからです」

ベルは満面の笑顔でロキに言う。

ロキは少し考えたあとにベルに告げた。

ロキ「よし！なんか面白そうやし合格」

ロキは娯楽を求めて下界に降りてきた神一柱である。だから最大派閥の主神…言い換えれば第一級冒険者などの、言わば英雄候補を多く眷属にしている神である。だからこそこの少年に少しの興味を持った。だから合格にしたと言うものである。

その後ロキに取り敢えず恩恵刻むから別の部屋に移る旨を伝えられたのでそれに従い恩恵を受ける。

恩恵…それは神々が下界に自らの神の力を封印した後に行える数少ない行為の一つ。恩恵はその中でも最たる例であり言わば下界の子供を自ら眷属として全知零能の自分を養ってもらう。代わりに子供に与える力。いや子供に成長を促す促進剤の役割を持つ物である。

ロキ「よーし刻んだでーなんかスキルでも発現してるといいなぁ。まあ初めやし多分なんもでえへん……と…思うけ…ど……ッ?」

以下ステイタス

ベル・クラネル
レベル・１
力：Ｉ　０
耐久：Ｉ　０
器用：Ｉ　０
敏捷：Ｉ　０
魔力：Ｉ　０

《魔法》

《スキル》

【復讐憧憬（リアリス・フレーゼ）】

・早熟する

・想いの丈により効果上昇

・想いが続く限り効果持続

【死滅願望（アルゴノウト）】

・能動的行動に対するチャージ実行

【神羅凶誓（ロストワード・エンゲージ）】

・神威途絶（ノーゼ・ディストラス）

・超克起源（エクス・アルカイド）

・超越界幻（デウス・アルカディ）

・破滅帝法（アーソラティ・ルヴォン）

その時ロキは今自身が新たに眷属としたベルのステイタスに少し違和感を覚えた。この違和感が何なのかわ分からない。しかし確信的に違和感と呼べるものがそこにはあった。咄嗟に目を擦って再度見るとさっきまであった違和感は嘘の用に消え失せて

おり、そこには新たに刻まれた道家のエンブレムとステイタスが、書かれているだけだった。

ロキ『気のせい…か？』

ベル「？神様？どうかしましたか？」

ロキはベルに声をかけられてハッと我に帰る。そして改めて見たベルのステイタスに頭を痛めつつそれを共通語（コイネー）に直し、羊皮紙に移しとる。

ロキはさっきの違和感を考えないことにしてベルに刻まれているスキルについて考えた。

ロキ「……いーやなんでもないでぇちょっとびっくりしてなぁ。そやそやこれ見てやベルたんなんとスキルが発現しとるねん！」

ロキはさも興奮した様な口振り（実際に興奮しているが先程の事もまだ忘れられはしないから興奮3：スキル発現による驚愕5：違和感2のようになっている）でベルに羊皮紙を押し付ける。

以下ステイタス

ベル・クラネル

レベル・１
力：Ｉ　０
耐久：Ｉ　０
器用：Ｉ　０
敏捷：Ｉ　０
魔力：Ｉ　０

《魔法》

《スキル》
【英雄憧憬（リアリス・フレーゼ）】
・早熟する
・想いの丈により効果上昇
・想いが続く限り効果持続
【英雄願望（アルゴノート）】
・能動的行動に対するチャージ実行権

ベル「……」
ロキ「なんやどないしたんやベルたん。スキル発現なんてそうそうないねんで？」

ベル「あ…いえなんか実感湧かなくて」
ベルは恥ずかしそうに頭を掻いている。その時べるがハッと何かに気づいた様だ。
ベル「神様。この消した跡みたいなのなんですか？」
ロキはギクっとした顔でベルに言った。
ロキ「実はなぁ……手元が狂ってもうたんやそれw」
ロキはケロッとした顔でベルにいった。
ベル「もお。神様ったら」
ベルは自分が入ったファミリアは面白い所だなと思いながらにこやかに微笑んでいる。
その夜、にベルはロキに与えられた自室で自分のステイタスを見ていた。本来なら幹部以外はルームシェアのような感じで同室の者がいるのだが生憎他の部屋は全室埋まったおりベルは一人部屋様な感じになっている。ロキ曰く「新しい団員がまた増えたらベルたんの部屋が賑やかになる」との事だった。
ベットの上に寝転がり、ステイタスが共通語（コイネー）で書かれた羊皮紙を見ながらベルは「やっぱり神は嫌いだな…」と呟いた。
この呟きは黄昏の館に居るだれにも届く事なく夜の深い闇に消えていく。

始まりはやっぱりダンジョンだよねぇ

背景　おじいちゃん

今日僕はギルドに冒険者登録をしに行ってその後に念願の初ダンジョンに行きました。

上層と呼ばれているそこにはゴブリンなどの下級モンスターしか出ない筈です。

でもなぜでしょう?僕の後ろには直径２Ｍ(メドル)を有に超える大きな牛型の怪物(モンスター)が居ます。

神様どうして僕にこんなしうちをするのですか?僕は酷くてこの世界全ての神を殺しそう神様のことを恨んでしまいそうです。

どうか助けてください。

Ｐ．Ｓこのままじゃまじて死んじゃいます。

「さてと」とベルはため息混じりに言葉をつぶやく。それもそのはず何故なら今ベルは命を掛けた鬼ごっこを繰り広げているのだから当然である。

逃げるのはもちろんベル、そして見事鬼役に抜擢されたのは中層１７階に出現しギル

ドが発表しているレベルではレベル・２にカテゴライズされている牛型のモンスターもちろんお分かりですね？そうミノタウロスである。

当然ベルは今日初めてダンジョンに潜ったので経験値（エクセリア）は皆無に等しい。その中でレベル・２クラスのミノタウロスに絡まれるとか災難そのものである。

ベル「うわぁぁぁぁぁぁ!?」

ベルは逃げる、逃げて逃げて逃げる。ん？逃げるってダンジョン初めて入ったんだろ？１階層にミノが出たって？いやいやそんなわけないさ。

ミノタウロスが出たのは５階層。これでもかなりの異常事態（イレギュラー）ではあるがまだマシである。

ベルはあろうことか運でほぼモンスターに遭遇（エンカウント）せずに５階層まで降りてしまったのである。なんで幸運…いやこの場合は不運であろうか？まあ神の悪戯か、はたまたこれが運命なのかさておきベルは今壁際に追い込まれて絶体絶命である。

ベル『あ、死ぬ』

ベルは心の中でそう思った。その時走馬灯の如く１４年間の思い出が溢れて、頭の中を駆け巡る。

祖父との思い出や言葉。村の人達。そして…怖かったが優しかった義母さんや料理が美味しい義父さん

そしてそれを連れていった黒い死神（原初の幽冥と地下世界を司るダレカ）

……

……

……

……

ベル「……嫌だな…ここで死ぬのは。だってまだ……ナニモナシテイナイ」

そこからベルの行動は早かった。本拠の武器庫で借りたナイフに■■（スキル）願望を使う。

チャージ時間は5秒。そしてその5秒の間に今自分の誓いを想い力に変えて解き放つ。

ベル「ッ吹き飛べぇぇぇぇ」

轟音と共にベルの解き放つ斬撃。それは音を置き去りミノタウロスを切り倒す。

ことは無かった。

ベル「ッ……あっ」

正解に言えば確かにベルの放った斬撃はおよそレベル・1それも恩恵を受けて初め

て解き放つ威力ではなく単純な出力で言えばレベル・２に届き得たと言えよう。
しかしベルには戦いの経験はない。ましてや実践など行った事があるはず無い。簡単な話である。放った斬撃はモンスターの核である魔石に届く事なくミノタウロスの片腕を切り倒しただけだった。もちろんこれも普通はできない事ではあるが差し当たって今は目の前の石斧を振り上げる雄牛を倒さな無ければ意味がない。
つまるところ死である。
振り上げられた石斧はベルの華奢な体を容易に両断する…

……

……

……

筈だった

???「手間掛けやがって。死ね」

凄まじい打撃音。それと共に灰になったミノタウロス。そして自らの前に佇むは鋭い眼光を光らせ、左目の下辺りに青い稲妻の刺青をが彫られていて、こちらを見下ろす１人の狼人（ウェアウルフ）の青年だった。

その直後ベルの意識は暗い闇の中に落ちていった。

情報の宴　～宇宙（ユニバース）～

前回までのあらすじ
ベル君が不運（ラッキー）を引き起こして5階層まで行っちゃったよ♡
そしたらものの見事にミノタウロスとエンカウントしちゃった??
勿論逃げるベル君だけど勇気を出して渾身の反撃。
でも惜しくもミノの腕をぶっ飛ばしただけだったんだ。
あ！頭の上にでっかい石斧がうわぁ死んだわこれ…
…と思ったら前からでっかい打撃音がしてミノが粉砕??玉砕??大喝采されたよ。
ベル君はあー死にかけたから眠い…オヤスミナサイ　バタ　←イマココ
以上

数時間後
ベル「うぅん…。ここは…」
ベルが目を覚ます。目を覚ましたベルはまだ見慣れない天井をしばらくぼぉーっと

見ていたがようやくここが本拠であることに気づいた。
ロキ「お！起きたかベルたん。何があったか覚えとる？」
ロキは面白いものを見るようにベルを笑いながら声をかける。
ベル「えっと……あ！確かミノタウロスに襲われてから壁際に追い込まれて、そのあと狼人（ウェアウルフ）の人が助けてくれた所まで覚えてます」
ロキはベルの話を聞いて少し驚いたような表情をしてベルに聞く。
ロキ「狼人（ウェアウルフ）っちゅうことは…もしかしてベートか？左目の下ら辺に青い稲妻の刺青入れてたりした」
ベルはコクっと頷く。すると再度ロキは驚いた様子だった。
ロキから聞いた話を要約するとこうだ。
数時間前、ロキ・ファミリアの遠征隊が17階層に差し掛かった時、ミノタウロスの怪物の宴（モンスターパーティー）が発生した。
発生するだけなら対処できたのだがあろうことかミノは第一級冒険者に恐れ上層へと逃げていった。
そしてベルを襲ったミノタウロスをぶっ飛ばしたのが【凶狼（ヴァナルガンド）】ことベート・ローガと【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインのペアであった。
ベートが助けた時アイズは他のミノタウロスを切り倒して合流するところだったら

しくちょうどミノタウロスをベートが粉砕したところだったという。
ベル「……そうなんですか…それはお礼を言わないといけませんね。…あの人、ベートさんって言うんだ　ボソ」
ロキ「まあとりあえずベルたんが無事て良かったわ。さーて人生初のダンジョンでどんなけステイタス上がったんかな♪」
ロキはベルのステイタスを更新する。ベルの背に刻まれた錠(ロック)を外し、イコルを垂らしてステイタスを更新する。
ベル「……ッチ。触れんじゃねぇ神(ゴミ)」ボソ
ロキ「ん？なんか言ったか？ベルたん？」
ロキはベルが呟いた声を聞き取れ無かった。…そうもしここで気づけたのなら何かが変わっていたのかもしれない。

以下ステイタス

ベル・クラネル
ＬＶ．１

力：Ｈ　１４０
耐久：Ｉ　９８
器用：Ｆ　３５５
敏捷：Ｃ　６７８
魔力：Ｉ　０

《魔法》
【ルーヴェ】
・雷属性付与魔法（エンチャント）
・魔法吸収（マジックドレイン）
・損傷吸収（ダメージドレイン）
・追悼昇焔（メモリア・フィース）
・短縮鍵（リジェクトキー）【起動せよ（ユニヴァース）】
・起爆鍵（スペルキー）【炎牙（ハティ）】
・起爆鍵（スペルキー）【想焼（ヴェト）】
・起爆鍵（スペルキー）【解放（ゼート）】

詠唱

【解き放たれし神狼（フロス）の王　一傷幻想（ゲルギア）、二傷狼帝（ギオル）　、三傷孤狼（セレニテ）　枯れることなき唯一の希望
血潮を洗い、涙を枯らし、幻想（りそう）を示せ　忘れるな、癒えぬ傷など無いことを　この傷（いかり）
にこの痛哭（ぞうお）、汝の惰弱に汝の静火（れっかすべて）、世界を許し、運命（すべて）を壊し、涙を拭え　傷を牙に号哭（こえ）
を咆哮（たけび）に――――　喪いし追憶（ともがら）を力に　戒められし縛鎖、響く天叫、怒りの起源よ　この
身に変わり月を飲み込み零れた後悔（すべて）を食い尽くせ　その雷霆（きぼ）を纏（もって）いて　平らげろ】

《スキル》

【英雄願望（アルゴノウト）】

・能動的行動に対するチャージ実行権

【傷狼（クロニカル・ヴァルガンド）一途（ヴォルグス・ウェート）】

・月神昇禍（ウールヴ・ハリィ）

・月下解放（ロウガル・リゼート）

・死壊拒絶

『ロキが秘匿しているスキルはランクアップ時以外表示しないから注意してネ

by　作者』

ロキ「は？？？？？？？」

ロキは宇宙を展開した。当たり前である。トータル１２００オーバーのアビリティに何処か見たことある詠唱に魔法効果、おまけにおあつらえ向きな新スキル。

この異常なステイタスを見たロキの思考は一瞬、忘却こ彼方へと消え去り直ぐに戻ってきて宇宙を展開するなどと言う凄まじいことになっている。

ロキは悟った。情報の宴（モンスターパーティ）とはきっとこう言う物なのだろうと。ロキは思考を停止し、団長のフィンや幹部達（ベート除く）にこのステイタスを見せて入団を確実にしようと脳死で動き出す。

宴は踊る

ロキが宇宙を展開して数分間機能停止した後、ロキが辛うじて再起動した。
ロキは思考を再開し、もうなんでも良いやぁ（^ ○^）どうにでもなぁれ♪状態になってしまった。
ロキ「いやぁベルはすごいなぁ…こんな短期間でぽんぽんスキルに魔法を覚えるなんて…これはランクアップも直ぐかもなぁＨＡＨＡＨＡ」
ベル「はい！頑張りますね神様！」
そう意気込むベルにロキは「あ！忘れてたんやけどな今遠征帰りの子らで宴会してんねんけどな、そこでベルのお披露目会とフィン…団長に挨拶するからそのつもりしときてえな」と付け加え、店の住所とロキが団長に渡す様にともらった手紙を持った本拠を出る。
ベル「行ってきまーす」

少年移動中♪　ドカドカドカ

渡された住所に書かれてあった豊穣の女主人と言う店に到着したベル。満を持して店の扉を開ける。

???「いらっしゃいませにゃー」

入ると同時に黒髪の猫人（キャットピープル）のウエイトレスが出迎えてくれた。そして事情を説明しロキ・ファミリアの宴会場に案内してもらった。

ベル「えっと…あの…」

様々な種族の人達がテーブルを囲んでいる。その中から金色の髪と碧色の目を持つ小人族（パルゥム）の人が話しかけてくれた。

???「どうしたんだい？僕達に何か用があるのかい」

ベルはコクっと頷いた後に主神のクソ野郎ロキから預かった手紙をフィンに手渡し自分がどの様な経緯でここにきたのかを説明した。

この人が団長の【勇者（ブレイバー）】ことフィン・ディムナその人だった。

フィン「なるほど…事情はわかったよ。まぁ僕が居ない時に団員を増やしたのは怒りたいけど…ロキが大丈夫と言ったのなら大丈夫だろうね。うん改めて君をロキ・ファミ

リアに歓迎するよ」

じゃあ僕は手紙を読むからと、フィンに他の幹部達や団員に挨拶してきなさいと言われたからそれに従う。

まず初めは副団長の【九魔姫（ナインヘル）】リヴェリア・リヨス・アールヴに、2人目は【重傑（エルガルム）】ガレス・ランドロック、その後も【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインやヒリュテ姉妹などの団員と話をしていた。

そして最後に…【凶狼（ヴァナルガンド）】ベート・ローガ　。

ベル・クラネルがお礼を言いたい人。そして希望になりうる人少なくない好意を向けている人。

要するに一目惚れしました。という事である。

正直びっくりしている。ある事件があってから基本的に初対面の人は”1に警戒2に警戒3に警戒4に警戒”がモットーであるベルが一番することのないと思っていた恋愛の始まり。しかも男（どうせい）である。さらに言えばあの一瞬の間。おそらく瞬きよりも短い間にである。きっとベルが今までの人生で一番驚いたと言っても過言ではない。

とまあここまでペラペラしているのだから当然ベルはもうベートと話していると思っているだろう。

しかし実態は次の様な会話である。
以外会話文のみ
ベル「あの！…ダンジョンの中で助けていただいたと聞いたんですけど、本当にありがとうございました」
ベート「……別に助けた訳じゃねぇ。自分達のミスで雑魚が勝手にくたばるのを見てられなかっただけだ」
ベル「それでもです！ありがとうございました」
ベート「……そうかよ」
こんな感じである。中々の短さ。普通ならいやもちっと色々有るだろうがい!!とツッコミたくなるだろうがこと彼においては少し状況が違う。
実際に周りは……
「ええ!?あの馬鹿狼が普通にしてる!?」
とか
「素直なベートなどもうベートでは無いなハッハッハ」
などなどとかなりな意見だが実際にベート・ローガ　といえば罵詈雑言、誰にでも噛み付く凶狼などと言うイメージ…と言うか事実そうで有る彼がこんなにも素直なのは天変地異…それこそアポロンがいきなりまともになったとか、イシュタルがフレイヤた

まぁー靴ペロペロいたしますゥとかオッタルがいきなりフレイヤをぶん殴るぐらいあり得ないことである。

だがそれが実際に起こっているのはひとえに彼自身、ベルに興味があるからで有る。

理由は簡単。ベルが弱者の咆哮を上げる所をその目で見たからである。

普通、レベル・1がミノタウロス（ミノタウロス）と出会ったら逃げる。当たり前で有る。だって反撃したところで意味がないのだから。しかしベルはそんなこと知る物かと言わんばかりに勇敢に格上に挑み、倒すとまではいかないが傷を負わせると言うことを成し得たので有る。

これはベートが普段の罵倒…いや悪意の押し売り（ぶじん）にこめられている想いの集大成で有る。もちろんベートは男色と言うわけでは無い。だから自分のこの気持ちがなんなのか、この苛立ちがなんなのかはわかっていない。

だがきっとその気持ちはそう、遠くない未来にきっとベルを導いてくれるのだろう。

だが、ベルの中にある黒い炎（ナニカ）が何かまでは分からない。きっと分かるのは…とある剣の姫（同じ業を持つ物）だけなのかもしれない。

そして願わくばこの2人や彼の理解者が1人でも多く現れ、彼の炎（業）を鎮火してくれるのを祈っている。

第四話　宴は踊る